



『横濱毎日新聞』(明治4年8月25日付) 国立国会図書館蔵

「新聞」を主宰したほか、代議士として政界に活躍する。

さて記事は、横浜に出入港する船舶の紹介や、貿易に関する情報を主体とし、これに内外のニュースを加えた。広告の分量も、すこぶる多い。同紙の経営が主として広告の収入に頼っていたためであった。広告の文面も当時の世相を反映していて興味深いものがある。

紙面は明治四年四月から、四ページ建てとなった。記事の内容も、それだけ豊富となる。翌明治五年(一八七二)、発行所は本町六丁目に移り、社名も横濱毎日新聞会社と改めた。当時における気鋭の人士は、ぞくぞくと新聞会社に集まり、思うままに健筆をふるった。

創刊当時の紙代は、一日につき一匁(一錢六厘六毛)、一か月につき二十四匁(約四十錢)、一年分では二百五十匁(約四円)であった。それが明治五年六月十六日から、「紙幅を相^あ拡^{ひろ}め」るためと称して、一日につき一匁五分に値上げする。一か月で三十六匁、一年で三百六十匁となった。なお広告料は、十日までならば一字につき一分、一か月以上になると一字につき五厘であった。そこで百字分の広告を一か月にわたって掲載するときは、五匁(八錢三厘)を要したわけである。

こうして社業は日を追って発展し、一八七三(明治六)年六月には妻木頼矩を編集長にむかえた。月俸五十円であった。これは当時としては高給である。同年のうちには文章方(記者)として栗本鋤雲

や島田三郎が入社し、一八七四（明治七）年には仮名垣魯文も雑報記者となった。同年十二月には島田が編集長となり、一八七五年には肥塚龍も入社した。

これらの記者たちが、折りから高まってきた民権の論を展開する。政府は一八七五年六月二十八日、讒謗律ざんぼうりつを發して、言論の弾圧を加えたが、これに屈することなく新聞は政府攻撃の論陣を張ったのであった。この間、發行所は本社屋を新設するため、一八七三（明治六）年五月から元浜町四丁目に仮社屋を建てて移っていたが、一八七五年には広大な西洋館が落成し、再び本町にもどったのであった。

『横浜毎日』の後身

やがて明治も十二年をむかえる。同年十一月『横浜毎日新聞』は、創刊このかた号数も二千六百八十号をこえた。しかし横浜は、貿易港として発展をつづけているとはいえず、すでに政治や経済、さらに文化の中核は東京に移っている。当時の東京においても『東京日日新聞』や『朝野新聞』また『郵便報知新聞』など有力な日刊新聞がつぎつぎに発刊されており、これに対して横浜は「七里僻地ノ不便ナキ能ハズ」という状況におかれていた。もはや「政策方向ノ如何ヲ探リ、……内国商況ノ如何ヲ察セントセバ、東京ヲ除ぞとテ他ニ其超過シタル場所アルヲ見ズ」と考えられた。ここにおいて『横浜毎日新聞』を主宰する島田三郎は、東京で共に政治を論じてきた知友の沼間守一とはかり、出資者の了解を得て、本社を東京に移転するに至ったのである。すなわち明治十二年（一八七九）年十一月十八日、第二千六百九十号をもって、發行所を東京の京橋に移し、紙名も『東京横浜毎日新聞』と改めた。本町の社屋は「横浜局」となった。社長には沼間が就任し、島田は主筆となる。

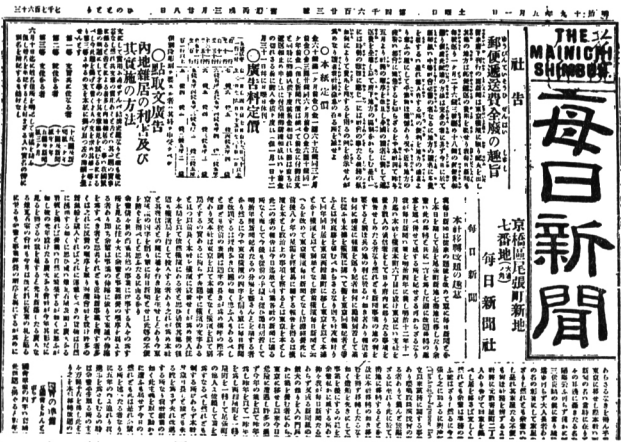
本町の社屋には「従来ノ編輯員数名ヲ置キ、横浜内外ノ商況ヲ詳ニシ、以テ読者ニ報道スルヲ怠ラズ」という姿勢をとったけれども、また紙名に「横浜」の文字が残されたけれども、もはや『東京横浜毎日』は、横浜の新聞ではなくなった。このと

の機関紙となっている。社長は沼間、主筆が肥塚、監事が島田であった。一八九〇年に沼間が死去すると、島田が社長となり、一九〇七年に及んだ。その間の明治三十年八月七日『毎日』は横浜で創刊されたから八千号を数えている。なお、この『毎日新聞』は、そのころの競争紙であった『東京日日新聞』はもちろん、『大阪毎日新聞』およびその後身である現在の『毎



『東京横浜毎日新聞』第2690号 (明治12年11月18付)

国立国会図書館蔵



『毎日新聞第』4623号 (明治19年9月1日付)

国立国会図書館蔵

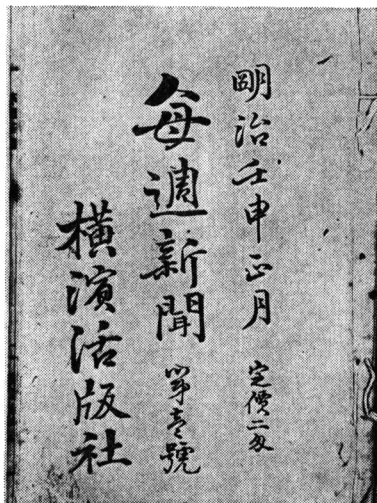
きをもつて神奈川県下には、有力な新聞が消えたのであった。これより『東京横浜毎日』は東京における有力紙として、中央の政界や言論界に重きをなす。さらに一八八六(明治十九)年五月一日には、紙名から「東京横浜」の文字も削られ、単に『毎日新聞』と称するようになった。本社も尾張町に移された。このころの同紙は、一八八一年四月に結成された改進黨

日新聞』とは、まったく関係のない、別箇の新聞である。

二 初期の新聞と雑誌

各種新聞の発行

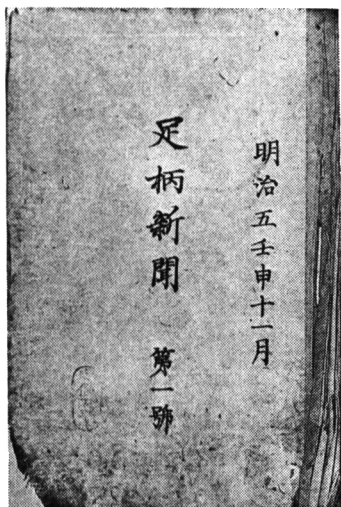
さきに『横浜毎日新聞』を発行した横浜活版社は、この新聞とは別に、明治四年（一八七二）十一月から『金港雜報』を発刊した。これは広告文に掲げられた通り「毎日新聞紙中より抜萃致し、且遺漏の分を増補して出版」した冊子型のものであった。一冊の代価は銀二匁（約三錢三厘）であり、翌五年四月の第二十九号まで、つづけて行された。



「毎週新聞」第1号（明治5年）
東京大学法学部明治新聞雑誌文庫蔵

明治五年二月二日からは、同じく横浜活版社から『毎週新聞』が発刊された。これも冊子型で広告文によれば「外国の新聞紙を翻訳すれ共、長文にして毎日新聞紙へ摺出兼候分を一冊に纏め」たものであった。代価は明らかでない。週刊をめざしたが、実際には十日ほどの間隔で『金港雜報』と並行して発行された。しかし『毎週新聞』も同年八月、第十二号を発行したまま、廃刊されてしまった。

その後、一八七四（明治七）年六月には『五州雜報』が発刊された。発行所は横浜新聞会社、印刷所は横浜活版社である。やはり『横浜毎日』とは違った編集方針をとり「中外各種の新聞に就て、其最も奇事美談に渉る者を拾ひ、凡天地万物の創見・器械・技芸・農桑・牧畜の發明等、



「足柄新聞」第1号(明治5年)
東京大学法学部明治新聞雑誌文庫蔵

世に裨益ある者、及才智を益すべき者を輯録した。今日の科学記事まで採録したわけであって「萃^すを抜き英を結び、机上の珍玩に供せん」としたのである。しかし、これも所期の売行きを得なかつたらしく、同年十一月に第十六号をもって廃刊された。これよりさき、明治五年(一八七二)十一月には、当時の足柄県において『足柄新聞』が発刊されている。足柄県の境域は、今日の神奈川県西半から静岡県東部(伊豆)にわたっており、県庁は小田原に置かれた。これまで神奈川県下の新聞といえ、ことごとく横浜において発行されている。ここに及んで、横浜にくらべれば開化の遅れた足柄県からも、独自の新聞が誕生したことは、注目に価すると言えらるであらう。

発刊にあたっては、足柄県の地域が「地勢^{きよあ}狹隘、人民^{ころう}固陋、随テ新見異事ノ伝播極メテ遅ク、刊行ノ料に充ルモノ亦多カラザルベシ」と称している。けれども記事は、県の人事から県政一斑、さらに県下の事件など、多岐にわたっており、中央からの布達も掲げている。まさしく地方新聞として、独特の報道をなしていたのであって、この地方の動きを見る上には貴重な記録といえることができる。明治五年(一八七二)には第一号および第二号を発行、一八七三(明治二)年一月に改めて同年の第一号を発行した。以後、五月発行の第八号までは存在が確認されているが、いつまで続刊されたかは明らかでない。

『仮名読新聞』

東京においては、明治五年二月『東京日日新聞』が創刊され、三月に『日新真事誌』、六月に『郵便報知新聞』が発刊した。これらは『横浜毎日新聞』と同じく、いわば政論新聞として知識層を対象とし、当時は「大新聞」と呼ばれた。記事も固い文章で、大衆には難解であった。これに対して平易な文章

で、世の上のできごとを、時には興味本位の筆致で報道する『小新聞』があらわれる。一八七四（明治七）年十一月に創刊された『読売新聞』や、一八七五（明治八）年四月発刊の『平仮名絵入新聞』は、まさしく読者を大衆に求めた小新聞であった。

つづいて一八七五年十一月一日に横浜で発刊されたのが、仮名垣魯文の『假名読新聞』であった。魯文は神奈川県庁に勤めながら、『横浜毎日新聞』の雑報記者として活躍し、文名すこぶる高かった。そして一八七五年には県庁を退職し、新聞を発刊するに至る。発行所は横浜新聞社で、支局を東京新橋の文明社に設けた。第一号の巻頭に曰く。

東西く、発行の三番叟より五評判に預かり升た読売と平仮名の両新聞の中間を潜り鵜の真似するからす飛も毎日新聞元祖の本社開業以来のお得意を外へはやらじとすぐりを鳴らし曲りなりにも仮名釘流お邪魔にのたくる蚯蚓書 弥々、今日より隔日毎に出刷升れば、とつは一偏にお購求をねがひ升

このような文体で、横浜や東京をはじめ内外の風聞を興味深く報道した。官庁よりの布達を「官令」とし、ニュースを「新聞」として掲げたほか、投書の「寄書」には端唄や狂歌も収める。また「広告」ものせた。したがって「モシ旦那へ此節ハ新聞がはやり升が大きいのハ（大新聞は）わたくし共にハわかりませんから半分程は読ません其上に毎月の事だから読にひまがかゝるのでいけません子エ 夫につけても読売絵入今度出来た仮名読此三ツに限り升ヨすこし読たりないくらいであしたを待のがあしみてす子エ」（第二号）というような好評を得たのであった。

体裁は構長の紙面に二段組、二ページ建てであった。当初は発刊の辞にもあるとおり隔日刊であったが、明治九年（一八七六）八月十七日からは日刊となる。定価は一枚につき七厘五毛、一か月では前金九錢、三か月では二十五錢であった。この代金について、一部を八厘で売りつけられたと、元町の読者から投書があった。これに魯文は次のように答えている（第五号）。

元町の坊ちゃん お前 鼻負にしてよく買っておくれだねへ 有難たう一枚売ハ七厘五毛に違ひないのハ 新聞の末に書を通



『ジャパン・パンチ』表紙(1866年)

りだよ 若し売子が八厘だといったら定価部を証拠に扱ひ所へでも引張てお出なさい 後の為だから 思ふさま いぢめておやり 頼みましたよ 編者 かながきろふん

こうして『仮名読』は「四方看客の愛顧により漸々盛大に」なっていた。しかし当時の新聞は「専ら東京の事情を記するを面目と致すに付き何分七里間の鉄道にて府下の種子を持越してハ腐れ易いと申す処より」一八七七(明治十)年三月からは、発行所を東京の京橋に移してしまつたのである。社名も「仮名読新聞社」と改められた。評判の新聞が、ここでも神奈川県下から消えている。文明開化のさきがけをなした横浜であつたが、明治十年代には新しい文化の舞台が、つぎつぎ横浜から東京へと移つていったのであつた。

パンチ絵の登場

幕末の横浜には、英文の漫画雑誌も発行されていた。洋画の技法をわが国に伝えたワグマン Charles Wirgman の発行によるものであり、題名を『ジャパン・パンチ The Japan Punch』という。創刊は文久二年(一八六二)七月といわれている。体裁は、和紙を十余枚つづつて、第一頁を表紙とし、大きさはタテ35センチ、ヨコ25センチであつた。初めは木版刷であつたが、のちに石版刷となつている。題名のパンチとは、パンチネロ PUNCHINELLO を略したもので、あやつり人形の主人公であり、大きな曲った鼻をもつていた。ロンドンでは、すでに一八四一(天保十二)年『パンチ』の題名で雑誌が発行され

ている。これを模してワグマンは、横浜居留地の外人むけに、諷刺をこめた絵入り雑誌を発刊したのであった。

ワグマンについては、その生年月日も、横浜に来た正確な日付も、さまざまな説があつて明らかではない。しかし外人墓地にある墓碑や、イギリスの記録から見て、一八三三年八月、ロンドンに生まれた、と考えてよいであろう。日本へは、『イラストレーテド・ロンドン・ニュース The Illustrated London News』の特派員として、おそらくは文久元年（一八六一）七月、横浜に着いた。日本に来る前は中国にあつて、取材に当たっていたのであつた。訪日のとき、二十九歳に達していた。

横浜に住みついたワグマンは、その目にふれる日本の風物や生活、また幕末の諸事件を、丹念にスケッチしてはロンドンに送った。その絵と記事がロンドンの紙面をにぎわせたことは、いうまでもない。同時にそれは、日本を紹介する資料ともなった。このように記者として活躍するかたわら、日本における漫画雑誌の先駆ともいふべき『ジャパン・パンチ』を発刊したのである。刊行は不定期であつたが、明治に及んでも続刊され、一八八七（明治二十）年六月に廃刊されるまで、約百七十号を数えた。発刊の一年あまり後（文久二年あるいは三年）には小沢カネと結婚し、その間に男子、小沢一郎（Charles）をもうけている。ワグマンのもとに出入りして油絵を学ぶ者も多く、明治前期の画壇に登場した五姓田芳柳、その子の義松、高橋由一、川上冬崖、山本芳翠、小林清親らは、いずれも直接に教えを受けた者たちであつた。

さて『ジャパン・パンチ』は、日本人の間では「ポンチ」と呼ばれた。福地桜痴も「西洋新聞紙中、ポンチといふものあり、是は鳥羽絵の風にて、可笑き絵組を取認め、基中に寓意あり……」と註している（明治元年『江湖新聞』）。ここから「ポンチ絵」という語が生まれた。

一八七四（明治七）年七月には『ジャパン・パンチ』をまねて、仮名垣魯文が『絵新聞日本地』を、横浜桜木町から発行した。発行に当たっては「自今在留の英人ワクマン氏が鼓筆のポンチに模擬し号して日本地と題す」と記している。この雑誌は

二号で廃刊されたが、やがて一八七七（明治十）年三月、東京において『團々珍聞』たまごまが発刊されるに至る。

ワグマンは一八八七（明治二十）年秋、いったんイギリスに帰った。そのため雑誌も廃刊されたのである。しかし住みなれた横浜を忘れることができず、再び来日する。間もなく病床に伏し、一八九一（明治二十四）年二月八日に死去した。五十八歳であった。その墓は山手の外人墓地にある。毎年二月八日には「ポンチはなまつり」が営まれている。

三 洋式の建造物

鉄橋と洋風建築

いわゆる関内と関外とをつなぐために、吉田新田の堤から、太田新田の堤にかけて、その間を流れる堀割の上に架けられたのが、吉田橋である。安政六年（一八五九）の開港直後、応急の施設として長い木造の橋が架けられ、当初は新大橋と呼ばれた。やがて、この大橋も使用に耐えられなくなったため、文久二年（一八六二）には、その南方に新しい橋が架け替えられた。しかし港ヨコハマの発展にしたがって、交通量は日ましにふえ、新しい橋も損傷がはげしくなる。慶応三年（一八六七）九月には、とりあえず仮橋を設けて、本橋の補修をほどこした。

このとき地元に住民からは、永代の使用に堪える鉄製の橋を架けてほしいとの要望があがり、居留地の外交団もまた、鉄橋の建造をうながした。こうして幕府も、ついに鉄橋を架設する計画を立てるに至ったが、やがて時勢は変わって明治の世となる。新政府は、燈明台役所のお雇い技師ブラントンに設計を委任し、明治二年（一八六九）の初めから工事に着手した。まず堅固な護岸工事をほどこし、イギリスから取り寄せた鉄材をもって、十一月には日本最初の鉄橋が完成する。幅五メートル、長さ二十四メートル、工費は七千円余りであった。鉄橋の威容に、当時の人びとは驚きの目を見はり、とくに「かねのはし」と呼ばれて、

その名は全国にひびきわたった。

ところが関内と関外の埋立てが進むにつれて、橋詰めの地点が低くなる。明治四年十一月に吉田橋の関門が撤廃されてから後、交通量はますます増大し、橋台を引き上げる必要が痛感されるに至った。この難工事を請け負ったのが、信州出身の土建業者、宮坂初太郎と土屋茂十郎の両名である。一八七三（明治六）年三月、七日間昼夜兼行の工事をもって、みごとに引上げを達成した。

こうして吉田橋は、一九一〇（明治四十三）年、新しい鉄橋に架け替えられるまで、長く交通の要衝として、大きな役割を果たしたのである。横浜の中樞に架けられた「かねのはし」は、まさしく開化の産物であった。

開化の建造物は、鉄橋だけではない。開港から数年をへると、横浜の街頭には洋風の居館が建ち始めている。外国人の要求にしたがって、日本人の大工が指示されるままに建てたものであった。日本人には洋風と感じられても、実質は日本在来の木造建築にほかならなかった。

ところで慶応二年（一八六六）十月二十日、横浜は空前の大火に見舞われる。いわゆる「豚屋火事」であって、居留地のめぼしい建物もことごとく灰になった。しかも、この大火の経験から、今後の建物は耐火構造であること、また街区に防火設備をほどこすことの必要が認められたのである。居留地はもちろん、これに近接する日本人町の建物は、瓦ぶきの屋根、煉瓦造または石造（あるいは厚い石灰）にするという規則も定められた。日本人もまた、洋風建築の家に住むことが求められたのである。

こうして横浜には、つぎつぎに洋風建築が建てられてゆく。慶応三年（一八六七）九月には、本町一丁目（現在 神奈川県庁所在地）に石造二階建ての横浜運上所が落成した。これはわが国における最初の洋風建築と見なされている。ついで横浜役所が